

令和元年度病虫害発生予報第4号

令和元年6月5日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要

区分	農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	いもち病（葉いもち）	平年並	平年並
		縞葉枯病（ヒメトビウンカ）	平年並	やや多い
		イネミズゾウムシ	—	平年並
果樹	ナシ	黒斑病	平年並	やや多い
		黒星病	平年並	やや少ない
		輪紋病	平年並	平年並
		アブラムシ類	平年並	やや多い
		ニセナシサビダニ	平年並	平年並
		シンクイムシ類	平年並	平年並
	カキ	落葉病	平年並	平年並
		炭疽病	平年並	平年並
		カキノヘタムシガ	平年並	平年並
ブドウ	べと病	平年並	やや少ない	
	チャノキイロアザミウマ ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ）	平年並	平年並	
野菜	スイカ	つる枯病、炭疽病	平年並	平年並
		うどんこ病	平年並	平年並
		アブラムシ類	—	やや多い
		ハダニ類	—	やや多い
	イチゴ（育苗期）	うどんこ病	平年並	平年並
		炭疽病	平年並	平年並
		アブラムシ類 ハダニ類	平年並	平年並
	ネギ	べと病	—	やや少ない
		さび病	平年並	平年並
黒斑病		平年並	平年並	
ネギアザミウマ ネギハモグリバエ		— —	やや多い 平年並	

気象予報（抜粋）

1 か月予報（6月1日～6月30日：5月30日、広島地方气象台発表）

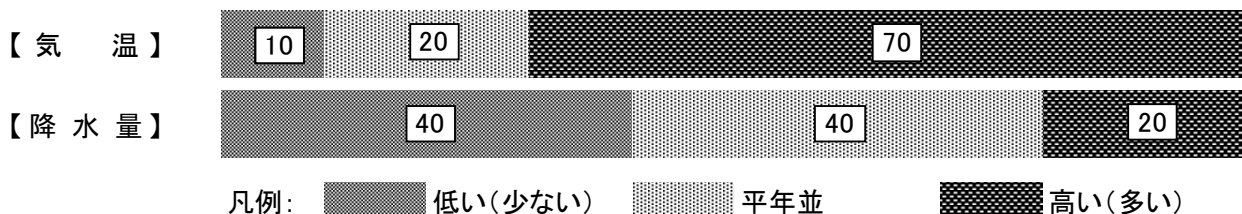
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。

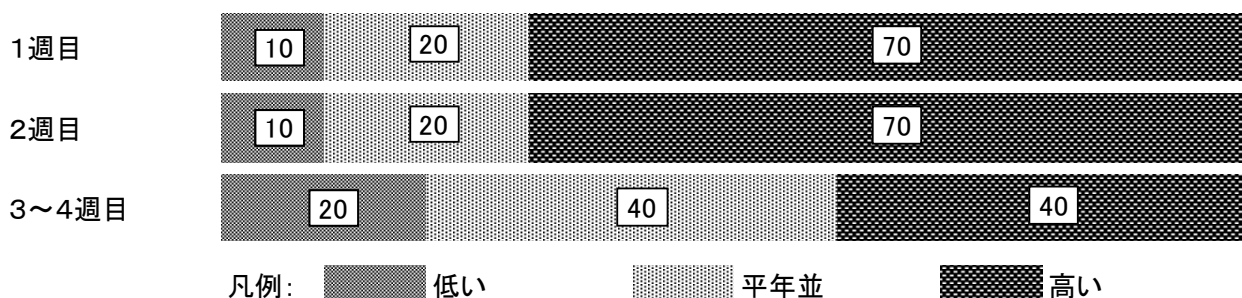
向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率70%です。2週目は、高い確率70%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

[イネ]

1 いもち病（葉いもち）

（1）予報の内容

発生地域 県内全域
発生時期 平年並
発生量 平年並

（2）予報の根拠

ア 6月3日現在、苗いもちの発生は確認されていない。しかし、向こう1か月の気象予報によると、気温の高い日が多いことが予想されていることから、特に置き苗の葉いもちの発生に注意が必要である。

イ 長期効果持続型の育苗箱施用剤が広く普及している。

ウ 向こう3か月の気象予報によると、6月は平年に比べ曇りや雨の日が少ないと予想されており、葉いもちの発生に好適ではない。しかし、7月は平年に比べ曇りや雨の日が多いと予想されており、葉いもちの発生に好適である。以上のことから葉いもちの発生時期及び発生量は平年並と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 移植後は、ほ場をよく観察して本病の早期発見に努める。急性型病斑がみられた場合は、病害虫防除指針などを参考にして、直ちに治療効果のある粉剤、水和剤などにより防除を行う。

イ 「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」、「きぬむすめ」などの本病に弱い品種の栽培、

- 窒素肥料の多施用、遅植えなどの条件では特に発生しやすいため、注意する。
- ウ 育苗箱施用剤を使用しても十分な効果が得られない場合があるため、ほ場の見回りなどを行い、本病の早期発見に努める。
- エ 補植用置き苗は、本田における発生源となることが多いため、速やかに処分する。
- オ 平成30年からストロビルリン系薬剤耐性菌の広域発生がみられなかった地域では、本系統薬剤の本田地上散布剤及びヘリ防除剤の再使用が可能である。ただし、耐性菌の再発生を防ぐために、本系統薬剤の同一年における連用と採種ほ場およびその周辺ほ場における使用を控える。なお、本系統の育苗箱施用剤については、引き続き県内全域において使用を控える。

2 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア これまでの気温の推移及び向こう1か月の気象予報から、本病の病原ウイルスを媒介するヒメトビウンカ第2世代幼虫のふ化最盛期は、平年並の6月第6半旬から7月第1半旬になると予想される。
- イ 前年の縞葉枯病の発生は多かったが、発病程度は低かった。
- ウ 前年のヒメトビウンカの発生は多く、本種の越冬量が多いと予想される。
- エ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、本病の発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本病の常発地および多発地域で、ヒメトビウンカに対して高い防除効果を示す育苗箱施用剤を使用していない場合は、第2世代幼虫のふ化最盛期に、粉剤、水和剤などを散布する。使用薬剤については、病虫害防除指針などを参考とする。
- イ ヒメトビウンカはイネの葉色が濃いほ場に発生しやすいので、窒素過多にならないよう注意する。

3 イネミズゾウムシ

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

5月第6半旬現在、予察灯への総誘殺数は平年並である。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 育苗箱施用剤による防除を行っていても本田での食害が急増する場合には、病虫害防除指針などを参考にして、追加防除を行う。
- イ 直播栽培などの育苗箱施用剤を使用していない水田において、被害葉が顕著に増加し、成虫密度が1株当たり0.5頭以上になった場合は、病虫害防除指針などを参考にして、粒剤などで防除を行う。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 冬季に行った越冬菌密度調査の結果、短果枝の病芽率、一年枝の病枝率及び枝病斑数は平年並であった。

イ 県予察ほ場における5月以降の孢子飛散数は、やや多く推移している。

ウ 4月下旬～5月上旬に行った県内巡回調査（ポリ袋検定）の結果、平均発病果率は平年に比べてやや高かった。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 新梢が伸びると薬液の付着むらが出やすいので、新梢の先端まで薬液が十分かかるよう注意する。

イ 薬剤は有機銅水和剤（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）

1, 000倍液、チウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）500倍とポリオキシシリンAL水和剤1, 500倍の混用液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ナリアWDG2, 000倍液などを使用する。

ウ 園内の風通しをよくするため、下草の管理を徹底する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並
発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 5月の県予察ほ場における子のう孢子及び分生孢子の飛散数は、少雨のため少なく経過した。

イ 5月上旬に行った県内巡回調査の結果、平均発病果率は0.1%（平年：0.2%）、平均発病葉率は0.0%（平年：0.3%）といずれも平年に比べてやや少なかった。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病した葉や幼果は取り除き、園外に持ち出し処分する。

イ 赤ナシの有袋栽培では、袋掛け直前に必ず薬剤散布を行って袋掛けを行う。

ウ 薬剤はチウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）

500倍液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ベルコートフロアブル

1, 500倍液、オキシラン水和剤600倍液、ナリアWDG2, 000倍液などを使用する。

エ 現在発生が多い園では、防除効果の高いDMI剤（アンビルフロアブル

1, 500倍液、スコア顆粒水和剤4, 000倍液など）を追加散布する。

オ DMI剤の散布にあたっては、薬剤耐性菌の発生を回避するため、DMI剤以外の薬剤と混用し、輪番散布とする。

カ 降雨が多い場合は、薬剤散布間隔が空き過ぎないように注意する。

3 輪紋病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 昨年の発生量は平年並であり、伝染源のいぼ皮病斑の密度も平年並と見込まれる。
イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果実の発病は袋掛けで予防できるが、袋掛けが遅れると発病が増加するので、摘果が終わり次第、早めに袋掛けを行う。
イ 果実及び枝の発病を抑えるため、梅雨期の薬剤散布を徹底する。
ウ いぼ皮病斑が認められる場合は、見つけ次第削り取る。これが難しい場合は、トップジンMペーストなどによる病斑の封じ込めを行う。
エ 薬剤はオキシラン水和剤600倍液、ナリアWDG2, 000倍液などを使用する。

4 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月第6半旬現在、県予察ほ場（殺虫剤無散布体系）におけるアブラムシ類の発生量はほぼ平年並となっている。
イ 5月下旬に行った県内9園の巡回調査の結果、アブラムシ類の発生量は平年並～やや多かった。
ウ 向こう1か月の気象予報から、アブラムシ類の第1回目の発生盛期は平年並の6月上旬頃、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア アブラムシ類の発生が多く認められるナシ園では、アドマイヤーフロアブル5, 000倍液またはウララDF4, 000倍液などを散布する。
イ アドマイヤーフロアブルなどのネオニコチノイド系殺虫剤の使用にあたっては、連用による薬剤抵抗性の発達を避けるため、最小限の使用とする。

5 ニセナシサビダニ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、県予察ほ場（殺ダニ剤無散布）におけるニセナシサビダニの新梢先端葉1枚当たりの寄生個体数は42.4頭（平年：80.7頭）で発生量は平年並となっている。
イ 向こう1か月の気象予報から、発生最盛期は平年並の6月下旬頃、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 第1回目の防除は発生初期の5月下旬頃、第2回目の防除は6月中旬頃を目安に実施する。
イ 薬剤はモベントフロアブル2, 000倍液、ハチハチフロアブル2, 000倍液などを使用し、ニセナシサビダニが寄生している新梢先端部に薬液が十分付着するように散布する。

6 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア ナシヒメシンクイの越冬世代成虫(第1回成虫)の湯梨浜町における発生盛期は、平年並の4月中旬であった。

イ 現地9地点で調査しているナシヒメシンクイのフェロモントラップにおける越冬世代成虫の誘殺数は、ほぼ平年並であった。

ウ 向こう1か月の気象予報から、ナシヒメシンクイの第1世代成虫(第2回成虫)の発生盛期は平年並の6月上中旬頃、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 受粉樹に残っている果実など(裸果)はシンクイムシ類の発生源となるので早急に除去する。

イ 各地区の防除暦を参考に定期的な防除を行う。

[カ キ]

1 落葉病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 昨年の発生量は平年並であったため、越冬伝染源量は平年並であると見込まれる。

イ 本病は連続降雨により発病が助長される。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本県では、角斑落葉病よりも円星落葉病の発生が多い。円星落葉病は二次伝染しないため、越冬伝染源である病落葉からの感染を防ぐことが重要である。

イ 落葉病は、6～7月の予防的な防除が重要である。発病後の薬剤散布による防除効果は期待できない。

ウ 薬剤は、落花始め～生理落果期に、有機銅水和剤(キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル)1,000倍液、デランフロアブル2,000倍液、マンゼブ水和剤(ジマンダイセン水和剤又はペンコゼブ水和剤)600倍液などを散布する。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 昨年の発生量は平年並であったため、越冬伝染源量は平年並と見込まれる。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 新梢における発病を徹底して防ぐことが、果実被害を防ぐ上で重要となる。

イ 開花期～新梢停止期(6月上旬～7月中旬頃)は重点防除時期となるので、防除間隔が空き過ぎないように注意する。

ウ 発病部位は見つけ次第切除し、園外に持ち出し処分する。

エ 薬剤は、有機銅水和剤(キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル)

1,000倍液、マンゼブ水和剤(ジマンダイセン水和剤またはペンコゼブ水和剤)の600倍液などを散布する。

3 カキノヘタムシガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月第5半旬現在、県予察ほ場（河原試験地）における予察灯への誘殺は認められていない。

イ 近年、被害量が少なく、平年並に少ない発生量と予想される。

ウ これまでの気象経過から、成虫の発生盛期は平年並の6月上旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 落葉病の防除時期に合わせてパダンSG水溶剤1，500倍液などを散布する。

イ なお、パダンSG水溶剤は、開花後に発生するチャノキイロアザミウマにも効果がある。

[ブドウ]

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、県内現地ほ場における本病の発生は認められていない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病は連続降雨により発病が助長され、施設栽培ではハウスの谷部など雨に当たりやすい場所や多かん水園での発生が多い。

イ 果粒が大豆大以上になると薬剤散布によって果粉が溶脱するので、果粒が小豆大までに新梢先端や副梢に十分量散布する。薬剤はランマンフロアブル2，000倍液、ベトファイター顆粒水和剤3，000倍液などを輪番散布する。

2 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月中旬現在、県予察ほ場（砂丘地農業研究センター）の黄色粘着トラップによる本種の誘殺数は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生密度が増加する時期は、平年並の6月下旬頃、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

例年発生が多い園では、モスピラン顆粒水溶剤4，000倍液、バリアード顆粒水和剤4，000倍液などを6月上～中旬に必ず散布する。ただし、果実に直接かかると果粉が溶脱する恐れがあるため、果房にかからないようにする。

3 ハマキムシ類（チャノココカクモンハマキ）

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月中旬現在、県予察ほ場（砂丘地農業研究センター）のフェロモントラップによる本種の誘殺数は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、第1世代成虫（第2回成虫）の発生盛期は平年並の6月下旬頃、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア チャノコカクモンハマキの発生が多い園では、サムコルフロアブル10の5,000倍液などを散布する。

イ 防風樹のサンゴジュは本種の発生源となるので注意する。

野 菜

[スイカ]

1 つる枯病、炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場におけるつる枯病、炭疽病の発生量は平年並である。

イ 本病は降雨によって発病が助長される。向こう1か月の気象予報から、発生時期及び発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア トンネル内が過湿にならないようにこまめに換気を行う。

イ 雨滴のあたる箇所や株元から発病しやすいので、雨がなるべくあたらないようにトンネルの開閉を行う。また、薬剤散布は株元にも薬液がよくかかるように丁寧にを行う。

ウ 雨の日が続くと発病が増加するので、散布間隔を短くし、雨の止み間に防除する。

エ ジマンダイセン水和剤600倍液、アントラコール顆粒水和剤600倍液、ダコニール1000の700倍液などを散布する。

2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は、25℃前後の気温と乾燥条件で発病が助長される。向こう1か月の気象予報から、発生時期及び発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病は、収穫期の草勢低下により発生が多くなるので、初期防除を徹底する。

イ 発生前には、ベルコート水和剤1,000倍液などを散布する。

ウ すでに発病のみられるほ場では、トリフミン水和剤5,000倍液、プロパティフロアブル3,000~4,000倍液などを散布する。

エ つる枯病が同時に発生している場合には、ポリベリン水和剤1,000倍液などを散布する。

3 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場におけるアブラムシ類の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、アブラムシ類の発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスの換気部分や出入口には防虫ネット被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止

に努める。

イ ハウス栽培で収穫間近なものは、モスピラン顆粒水溶剤2, 000倍液（使用時期：収穫3日前まで）を散布する。トンネル栽培では、肥大中期にはコルト顆粒水和剤4, 000倍液、収穫前にはハチハチフロアブル1, 000倍液（使用時期：収穫前日まで）などを散布する。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場におけるハダニ類の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

発生初期にバロックフロアブル2, 000倍液を散布する。その後も発生がみられた場合はマイトコーネフロアブル1, 000倍液、ダニサラバフロアブル1, 000倍液などを散布し、多発した場合にはコロマイト乳剤1, 000倍液を散布する。

[イチゴ（育苗期）]

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場の育苗床において本病の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期及び発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本ほ場に病原菌を持ち込まないために、特に6～7月の育苗期間中の防除を徹底する。

イ 防除にあたっては、葉裏へも薬剤が付着するように丁寧に散布を行う。

ウ 発病初期まではベルコート水和剤1, 000倍液などを散布する。すでに発病している場合には、カリグリーン800～1, 000倍液と、トリフミン水和剤5, 000倍液を混用散布する。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場において本病の発生は認められていない。

イ 本病は高温多雨で発病しやすい。向こう1か月の気象予報から、発生時期及び発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗期間中、下記の薬剤を定期的に散布する。下葉かきによる傷口、ランナーの切り口などからも感染するので、下葉かきの直後にも薬剤散布を行う。育苗初期の防除を徹底し、発病株は除去する。なお、薬剤散布にあたってはクラウン部分、葉柄、托葉、ランナーにも薬液が付着するように丁寧に散布する。

イ 育苗初期は、アミスター20フロアブル2, 000倍液、ゲッター水和剤1, 000倍液などを散布する。なお、アミスター20フロアブルは薬害が出やすいため、展着剤を加用しない。

ウ その後の散布薬剤は、ベルコート水和剤1, 000倍液、デランフロアブル

1, 000倍液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ジマンダイセン水和剤600倍液などを用いて、7～10日間隔で予防散布する。

3 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場の育苗床におけるアブラムシ類の発生量は平年と比べてやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期及び発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤はベストガード水溶剤2,000倍液、アーデント水和剤1,000倍液、サンヨール500倍液などを散布する。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場の育苗床におけるハダニ類の発生量は平年と比べてやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期及び発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

発生初期にサンヨール500倍液、アーデント水和剤1,000倍液、コテツフロアブル2,000倍液などを散布する。発生量が多い場合はコロマイト乳剤1,000～1,500倍液(親株床での登録)などを散布する。

[ネギ]

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は、15～20℃程度の気温で降雨が続くと発病が増加するが、向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病後のまん延が早いため発病前からの防除に努める。

イ ジマンダイセン水和剤600倍液、ランマンフロアブル2,000倍液、アリエッティ水和剤800倍液、ダイナモ顆粒水和剤2,000倍液などを予防散布する。

ウ 発病を認めたら直ちに、リドミルゴールドMZ1,000倍液、フォリオゴールド1,000倍液、レーバスフロアブル2,000倍液、プロポーズ顆粒水和剤1,000倍液、メジャーフロアブル2,000倍液などを散布する。

エ 同一成分を含む薬剤は連用しない。また、成分ごとの総使用回数に注意して薬剤を選定する。

2 さび病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生時期、発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期及び発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 6月に収穫する作型で、発病の多いほ場では、アミスター20フロアブル2,000倍液を散布する。

イ 7月以降に収穫する作型では、6月上旬からオンリーワンフロアブル1,000倍液、ラリー乳剤4,000倍液、ファンタジスタ顆粒水和剤3,000液などを散布する。

3 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生は認められていない。

イ 本病は気温が25℃前後で、降雨が多い場合、発病が助長される。向こう1か月の気象予報から、発生時期及び発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 根傷みや肥料不足になると発病しやすいので、排水対策を実施し、肥培管理に注意する。

イ 防除薬剤は、ポリベリン水和剤1,500倍液、ロブラール水和剤1,000倍液などを散布する。

4 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本種の発生量はやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗期後半から定植当日には以下のいずれかの処理を行う。ベリマークSC400倍液などのセルトレイ灌注やミネクトデュオ粒剤セルトレイ散布、定植前日から定植時には、ジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤）50倍液などのセルトレイ灌注、定植時には、ジノテフラン粒剤（アルバリン粒剤又はスタークル粒剤）6kg/10aなどの株元散布、ミネクトデュオ粒剤6kg/10aなどの植溝土壌混和あるいは作条散布と行う。

イ 土寄せ時にはダントツ粒剤6kg/10aの株元散布、ベストガード粒剤6kg/10aの株元処理を行う。

ウ 散布剤はハチハチ乳剤1,000倍液、ディアナSC2,500～5,000倍液などを散布する。

5 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本種の発生量はやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗期後半から定植当日には以下のいずれかの処理を行う。ベリマークSC400倍液などのセルトレイ灌注やミネクトデュオ粒剤セルトレイ散布、定植前日から定植時には、ジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤）50倍液などのセルトレイ灌注、定植時には、ジノテフラン粒剤（アルバリン粒剤又はスタークル粒剤）6kg/10aなどの株元散布、ミネクトデュオ粒剤6kg/10aの植溝土壌混和あるいは作条散布を行う。

イ 土寄せ時にはダントツ粒剤6kg/10aの株元散布、ベストガード粒剤6kg/10aの株元処理を行う。

ウ 散布剤はアグロスリン乳剤2,000倍液、ディアナSC2,500～5,000倍液などを散布する。

[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病虫害防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類）などの参考情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

<お問い合わせ>

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病虫害防除所

(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)

もしくは

鳥取県農業試験場環境研究室

(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県園芸試験場環境研究室

(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※ 予報第5号の発表は、7月3日（水）の予定です。

なお、予定日と実際の発表日が前後することがありますのでご注意ください。